

「喜悦の盈満」

第四講「エホバのよき地」

申命記8章1～10節

第四講 「エホバのよき地」

- 一、申命記の内容
- 二、聖書の一貫性
- 三、聖書の有機性
- 四、カナンはどのような所か
- 五、カナンとエジプト

一、申命記の内容と聖書の一貫性

申命記の内容は律法の再述。

シナイ山のふもとで与えられた律法を、もう一度、荒野で生まれた民に再述した。

旅行の回顧、律法の再述、新しい土地に入るための心構え

この書は主イエスさまが愛読された所であった。

聖書は、内容が全巻にわたって一貫している。

66巻が4,50人の記者により、1600年にわたって書かれたものに一貫性がある→背後に一貫した意志的存在がある以外ない。その存在とは神ご自身。

二、聖書の有機性

旧約と新約には有機的なつながりがある。

旧約は、後の新約の準備的、先行的な意味合いを帯びてつづられている。

- ・旧約に記されている歴史は、やがてくるできごとや明らかになる真理に対する予表や預言的な意味が含まれている。ただの記録ではない。
- ・旧約と新約は、それぞれを立体的に理解するために両方大切。
イスラエルの民がエジプトからカナンの地に移ったことにも意味がある。

申命記でモーセが語った内容のうち、これから入っていく土地がどのような所であるかということをもさらに深く考える。

三、カナンはどのような所か

カナンの地は、新約時代の何を予表しているのか。

エジプトも、間にある荒野も、紅海を横切ることも、カデシバルネヤもそれぞれ私たちの信仰生活に該当するものがある。

- (1) エジプトは、救われる前の人生。
- (2) 中間の荒野は、エジプトを出て救われたあと、きよめられる前のクリスチャン生活。
- (3) カナンの地は、「きよめ」の恵みに入った後の霊的状态の絵。

この中で自分がどこにいるかを意識することが大切。

エジプトとカナンを比較すると、きよめの生涯の内容と特色を理解する助けとなる。

四、カナンとエジプト

① エジプトの国と同じでない。

エジプトは束縛と奴隷の国だが、カナンはよい地。神さまの祝福の生涯。

② 泉と潤いに富んだ国。

自力的なあせりがなくなった生活。いつも新鮮で余裕がある。
ほんとうの意味でゆだねる生涯。

③ 貧困な世界でなく、豊かな世界。

やっどこさでなく余裕しゃくしゃくの凱旋的生涯。

その秘密は自分ではなく、聖霊。聖霊に明け渡すとき、聖霊が可能にしてください。それが結果を得るための条件。

四、カナンとエジプト(2)

④ 供給の世界。

理想ではなく現実の、乏しさのない生涯。
どんな時にも満足して満ち足りることができる。

⑤ 宝物が内蔵されている世界。

内に宿られる主イエス。私ではなくキリスト。

⑥ 満足と感謝の生涯。

神が道徳的な要求をされるときには、必ず先に与えるべきものを与える。
私たちが感謝を続けざるを得ないような恵みとよい物が、夢や空想ではなく
事実だとわからせてくださる。

まとめ

「きよめ」とは、

神がすべてのクリスチャンに入ることをお願いされる約束の地。